

【11】 死没年齢

[0] これも自覚的、意識的になしうるライフステージではないが、前項と同様の理由によって調査項目とした。

[1] 原始仏教聖典において年齢をともなった死亡記事には以下のようなものがある。

[1-1] 原始仏教聖典（A文献）の死没年齢記事を紹介する。

〈1〉 イシダーシー（Isidāsī）の過去世/不明（女性でもなく、男性でもなく；n' eva mahilā na puriso）/シュードラ/30歳⁽¹⁾

Therīgāthā (pp.166~167) vs.442~443：〔過去世〕それから〔わたし、イシダーシーは〕……婢の家に（dāsiyā ghare）生れ、女性でも男性でもなかった（n' eva mahilā na puriso）。30歳の時に死に（tiṃsativassamhi mato）、車夫の家（sākaṭīkakula）に娘として生まれた。

(1) 本「モノグラフ」6号、【資料集1-2】に「死没」資料として落ちていたものを補った。

〈2〉 釈尊①/男/クシャトリヤ/79歳

白法祖訳「仏般泥洹経」（大正01 p.172下）：年亦自至七十有九。惟斷生死迴流之淵。思惟深觀。從四天王。上至不想入。從不想轉還身中。自惟身中四大惡露。無一可珍。北首枕手猗右脇臥。屈膝累脚。便般泥曰。

失訳「般泥洹経」（大正01 p.188中）：……自我爲聖師。年至七十九。……

〈3〉 釈尊②/男/クシャトリヤ/80歳

MN.016 Mahāparinibbāna-s. (vol. II pp.100~156)：

〈4〉 釈尊③/男/クシャトリヤ/80歳

『増一阿含』026-009（大正02 p.640上）：釋迦文佛不久在世年向八十。然今世尊不久當取涅槃。

〈5〉（波斯匿王の母）/女/クシャトリヤ/100歳

『増一阿含』026-007（大正02 p.638上）：時大臣便作是念。此波斯匿王母。年向百歳今日命終。設當聞者王甚愁憂。不能飲食而得重病。我今當設方便。

〈6〉（父）/男/バラモン/100歳

『増一阿含』041-002（大正02 744下）：我頻七日中七男兒死。皆勇猛高才智慧難及。近六日之中。十二作使人無常。能堪作使無有懈怠。近五日已來。四兄弟無常。多諸妓術無事不閑。近四日已來父母命終。年向百歳捨我去世。近三日已來二婦復死。……

〈7〉（母）/女/バラモン/100歳

『増一阿含』041-002（大正02 744下）：同上

〈8〉 ブラフマーユ（Brahmāyu）/男/バラモン/120歳

MN.091 Brahmāyu-s. (vol. II pp.133~146)：その時ミティラー（Mithilā）にブラフマーユ婆羅門が住んでいた。年老い（jīṇṇa）年長け（vuddha）高齢（mahallaka）にして、晩年（addhagata）である老衰に達し（vayo anuppatta）、

生れて120歳 (*viṣaṃvassasatiko jātiyā*) であり、……ブラフマーユ婆羅門は釈尊の三十二相を調べた後、随順説を聞き、…… (p.146) 釈尊が去られて間もなく亡くなった《老熟/死没》。

〈9〉 (波斯匿王の祖母) /女/クシャトリヤ/120歳⁽¹⁾

SN.003-003-002 (vol. I p.096) : 世尊よ、わが (Pasenadi 王) 祖母は年若い、年長け高齢にして、晩年である老衰に達し、生れて120歳である。 *ayyakā me bhante kālakatā jīṇṇā vuḍḍhā mahallikā addhagatā vayo anuppattā visa-vassa-satikā jātiyā*。 ※波斯匿王は祖母が馬宝で死を逃れられるならば馬宝を、善き村または国で死を逃れられるならばこれらを与えるので、祖母を死なせないようにと世尊に頼む。しかし世尊は一切の衆生は死法であり、死を終わりとし、死を越え得ないものであると説く。波斯匿王の祖母は120歳で死没したとしてとった。

(1) 中村元訳『ブッダ 神々との対話』(岩波文庫 2001年〔1986年〕)の注に、
「長寿の人に言及する場合に「百二十歳まで生きた」という表現は古ウパニシャッド以来見られる一種の定型句である。必ずしも実際に百二十歳まで生きたというわけではないらしい」(p.333)とある。

〈10〉 須跋^① (Subhadra) /男/バラモン/120歳

Mahāparinirvāṇasūtra (pp.366~382) :

〈11〉 須跋^② /男/バラモン/120歳

『長阿含』002「遊行経」(大正01 p.025上) : 須跋

『雑阿含』979(大正02 p.253下) : 須跋陀羅

『別訳雑阿含』110(大正02 p.413上) : 須跋陀羅

白法祖訳「仏般泥洹経」(大正01 pp.164下~172下) : 須跋

失訳「般泥洹経」(大正01 pp.180上~188下) : 須跋

法顕訳「大般涅槃経」(大正01 pp.203中~204中) : 須跋陀羅

〈12〉 一梵志/男/バラモン/120歳

『長阿含』007「弊宿経」(大正01 p.046中) : 昔者此斯波釐村有一梵志。耆舊長宿年百二十。彼有二妻。一先有子。一始有娠。時彼梵志未久命終《死没》。

〈13〉 一婆羅門/男/バラモン/120歳

『四分律』「(比丘尼)波逸提070」(大正22 p.737上) : 往昔有一婆羅門。年百二十形體羸瘦。此婆羅門婦端政無比多生男女。此婆羅門繫心其婦及諸男女。初不捨離。以此愛着情篤遂至命終。

[10-2] 後期原始仏教聖典 (B文献) の死没年齢

〈1〉 一男/男/不明/1歳

『衆経撰雜譬喻』37(大正04 p.540上) : 昔有一人兩婦。大婦無兒。小婦生一男。端正可愛。其婿甚喜。大婦心内嫉之。外佯愛念劇於親子。兒年一歳許。家中皆知大婦愛重之無復疑心。大婦以針刺兒顛上令没皮肉。兒得病啼呼不復乳哺。家中大小皆不知所以。七日便死。

〈2〉 一長者子/男/ヴァイシャ (長者児) /4歳

- 『雜譬喻經』道略集 10 (大正 04 p.525 上) : 長者兒始年三歲。便持布施爲作弟子。至四歲乳母抱詣師所住寺。寺在山上累石作道。乳母抱兒不堅失手落地。頭側石上腦出而死。
- (3) 一長者子/男/ヴァイシャ (長者子) /5.5 歲 (5 歲・6 歲)
- 『雜寶藏經』47 (大正 04 p.469 上) : 昔佛在世。於一長者子。年五六歲。相師占之。福德具足。唯有短壽命《死没闕連》。將至外道六師所。望求長壽。曠彼六師都無有能與長壽法。將至佛所。白佛言。此子短壽。唯願世尊。與其長壽。佛言。無有是法能與長壽。重白佛言。願示方便。佛時教言。汝到城門下。見人出者。爲之作禮。入者亦禮。時有一鬼神。化作婆羅門身。欲來入城。小兒向禮。鬼呪願言。使汝長壽。此鬼乃是殺小兒鬼。但鬼神之法。不得二語。以許長壽。更不得殺。以其如是謙忍恭敬。得延壽命。
- (4) 一小兒/男/不明 (牧人) /7 歲
- ① 7 歲《就業》⇒② 7 歲《死没》
- 『六度集經』66 (大正 03 p.035 中) : 有一小兒厥年七歲。城外牧牛。遙聞比丘誦說經聲。即尋音往詣精舍中。禮比丘已却坐一面。聽其經言。時說色本聞之即解。兒大歡喜經句絕已。便問比丘。比丘應答不可兒意。是時小兒反爲解說。其義甚妙。昔所希聞。比丘聞之。歡喜甚悅。怪此小兒。乃有智慧非是凡人。時兒即去。還至牛所。所牧牛犢散走入山。兒尋其迹追逐求索。爾時值虎害此小兒。小兒命終《死没》。魂神即轉。
- (5) 一男/男/バラモン/7 歲
- 『中本起經』10 (大正 04 p.159 下) : 是時國內。有婆羅門。居富多寶。老無兒子。禱祠盡力。未後生男。其年七歲。得病便亡《死没》。
- (6) 一男/男/バラモン/7 歲
- 『法句譬喻經』 (大正 04 p.597 中) : 昔有婆羅門。年少出家學道。至年六十不能得道。婆羅門法六十不得道。然後歸家娶婦爲居。生得一男端正可愛。至年七歲書學聰了《就学》。才辯出口有踰人之操。卒得重病一宿命終《死没》。
- (7) 一長者子/男/ヴァイシャ (長者子) /7 歲
- 『義足經』06 (大正 04 p.178 下) : 佛便入城。城中時有一梵志死。壽年百二十死。復有一長者子。年七歲亦死。兩家俱送喪。皆持五綵幡。諸女弱皆被髮。親屬啼哭悲淚。……
- (8) 一長者子/男/ヴァイシャ (長者子) /7.5 歲 (7 歲・8 歲)
- 『雜譬喻經』失記 24 (大正 04 p.508 中) : 昔王舍城中人民多豐饒。九品異居不相雜錯。別有一億里。有一億財者。便入中。時有居士。規欲居中便行治生。苦身節用廣諸方計。數十年中九十萬數未滿一億。得病甚篤自知不濟。有一子年七八歲。囑語其妻曰。吾子小大。付與財物令廣治生。使足滿一億。必居其中。全吾生存之願矣。言竟終亡。喪送事畢。將子入示其寶物。父有遺教。須汝長大具一十萬足滿一億。居億里中。子報母言。何必須大便可付我早共居之。母即付之。於是童子以財物珍寶。供養三尊施與貧乏者。半年之中財物盡了。其母愁惱怪子所作。童子未幾身得重病遂便喪亡。其母既失物子又幼喪。憂愁憶之。……

〈9〉一男/男/バラモン/12歳

『大方便仏報恩経』（大正03 p.151中）：爾時毘舍離國有一婆羅門。執著邪見貪著我慢。舍利弗大目犍連往到其家。説法慰喻而不信受。執著邪論。其家大富財寶無量。家無有子。一旦崩亡財賄沒官。思惟是已。奉祠諸山及諸樹神。過九十日其婦便覺有娠。月滿生男。其兒端正人相具足。父母愛念衆人宗敬。至年十二。共諸等侶出外遊觀。道逢醉象馳奔踐踏。即便命終《死没》。

〈10〉一梵志女/女/バラモン/14.5歳（14歳・15歳）

『法句譬喻経』（大正04 p.576上）：昔佛在舍衛國祇樹給孤獨園。爲諸弟子説法。時有梵志女。年十四五。端正聰辯。父甚憐愛。卒得重病即便喪亡《死没》。

〈11〉（あるバラモンの息子）/男/バラモン/15.5歳（15歳・16歳）

Jātaka 449 Maṭṭakuṇḍali-j. (vol.IV p.059) : ある婆羅門の子息〔主分〕1人の有力な婆羅門の子が15・16歳 (pañcadasasoḷasavassa) で病気に取りつかれて死に天上界に生まれた《死没》。

〈12〉（梵志長者の子）/男/バラモン/20歳

『法句譬喻経』（大正04 p.605下）：有一梵志長者居在路側財富無數。正有一子其年二十。新爲娶婦未滿七日。夫婦相敬言語相順。……有一椽樹高大華好。婦欲得華無人與取。夫知婦意欲得椽華。即便上樹正取一華。復欲得一展轉上樹乃至細枝。枝折墮地傷中即死《死没》。

〈13〉釈尊/男/クシャトリヤ/80歳⁽¹⁾

『仏本行集経』（大正03 p.671中）：阿難。我今多陀阿伽度阿羅呵三藐三佛陀。住世八十歳。爲利益故。

(1) 釈尊の80歳入滅資料はたくさんある。また79歳とするものなどもあるがすべて省略する。「モノグラフ」第1号に掲載した【論文3】「釈尊の出家・成道・入滅年齢と誕生・出家・成道・入滅の月・日」p.115以下を参照されたい。

〈14〉一婆羅門/男/バラモン/80歳

『法句譬喻経』（大正04 p.586上）：昔佛在舍衛國。時城中有婆羅門。年向八十財富無數。爲人頑闇慳貪難化。不識道德不計無常。更作好舍。……老翁於後自授屋椽。椽墮打頭即時命過《死没》。

〈15〉波斯匿の母^①（大夫人）/女/クシャトリヤ/90歳

『法句譬喻経』（大正04 p.575下）：時國王波斯匿大夫人。年過九十卒得重病。醫藥望差遂便喪亡《死没》。

〈16〉喬答彌/女/クシャトリヤ/120歳⁽¹⁾

『根本有部律』「雜事」（大正24 p.248下）：大世主喬答彌等壽百二十歳。身無老相如。十六歳童女。……是故苾芻若他時不應言長壽。若故言者得越法罪。

(1) Mahāpajāpatī Gotamīの死亡記事については、「モノグラフ」第10号に掲載した【論文10】「Mahāpajāpatī Gotamīの生涯と比丘尼サンガの形成」p.068以下を参照されたい。

〈17〉菩薩の母/女/バラモン/120歳

Jātaka 061 Asātamanta-j. (vol. I p.285) : 菩薩は青年の母親の意図をくみ、120歳 (viṣaṃvassasatika) になる自身の母親を教材にして、女というものが淫らで

卑しいものであることを教えて、出家を促した。この日、菩薩の母親は120歳で亡くなった《死没》。

〈18〉アシタ仙/男/バラモン/120歳⁽¹⁾

『過去現在因果経』(大正03 p.627中)：〔阿私陀仙人〕今年壽。已百二十不久命終《死没関連》。

(1) 『異出菩薩本起経』(大正03 p.618上)では「年百餘歳」とあり、【資料集6】には収めたが本資料集では計算上、除外した。

〈19〉一梵志/男/バラモン/120歳

『義足経』06(大正04 p.178下)：佛便入城。城中時有一梵志死。壽年百二十死《死没》。復有一長者子。年七歳亦死。兩家俱送喪。皆持五綵幡。諸女弱皆被髮。親屬啼哭悲涙。……

〈20〉波斯匿の母^②/女/クシャトリヤ/120歳

『出曜経』(大正04 p.621上)：時國王波斯匿母年過百二十卒得重病。非醫藥所療神祇不能救。不經日夜遂便命終《死没》⁽¹⁾。

(1) 上記の外に次のような資料も存する。ただし同列には扱えないので参考として掲げておく。

①一給使/男/不明(給使)/11歳+数年

『法句譬喻経』(大正04 p.606中)：有一給使其年十一常爲王使。忠信奉法不失威儀。謙卑忍辱精進一心學誦經偈。知時先起已辦香火。數年之中精進如是不以爲勞。卒得重病遂致無常。

②一女/女/不明/1~14歳

『衆経撰雜譬喻』37(大正04 p.540上)：昔有一人兩婦。大婦無兒。小婦生一男。端正可愛。其婿甚喜。大婦心内嫉之。外佯愛念劇於親子。兒年一歳許。家中皆知大婦愛重之無復疑心。大婦以針刺兒顙上令沒皮肉。兒得病啼呼不復乳哺。家中大小皆不知所以。七日便死。大婦亦復啼哭。小婦摧念啼哭晝夜不息。不復飲食垂命。後便知爲大婦所傷。便欲報讐。行詣塔寺問諸比丘。大德。欲求心中所願。當修何功德。諸比丘答言。欲求所願者。當受持八關齋。所求如意。即從比丘受八戒齋便去。却後七日便死。轉身來生大婦。爲女端正。大婦愛之。年一歳死《死没》。大婦端坐不食。悲咽摧感劇於小婦。如是七返。或二年《死没》或三年《死没》。或四五年《死没》。或六七年《死没》。後轉端正倍勝於前。最後年十四已許人。垂當出門即夜便卒死《死没》。大婦啼哭憂惱。

なお本資料は子を殺された母の復讐劇であり、同じ苦しみを味わわせるためにその婦の子として生れては幾度も死んでみせる。本「モノグラフ」10号(p.261)では「死没」資料として取り上げ、注を付したように、①1歳、②2歳、③3歳、④4、5歳、⑤6、7歳、⑥14歳の合計6回の死没記事を含むが、「死没」資料というよりは、母子が共依存する、子が成人するまでの世代(1歳~14歳)を示す資料として解して、ここではカウントから削除し参考に止めた。

[2] 上記を統計的に分析してみる。

[2-1] 死没年齢のA文献・B文献資料を度数分布表にしてみると以下のようになる。

《死没年齢》

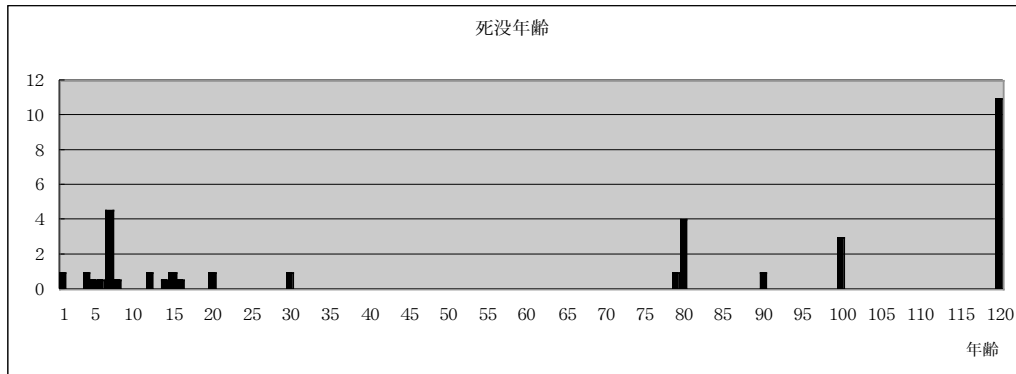
原始仏教聖典などにみる就学・結婚などの平均年齢

| 年齢 | A. 原始仏典 | | | | B. 後期仏典 | | | | 総計 |
|------|---------|---|----|---|----------------------------------|---|---------------|---|-----|
| | パーリ | | 漢訳 | | <i>Jātaka,</i> <i>Apadāna</i> | | 本縁部・ 根本有部律 | | |
| | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | 男 | 女 | |
| 1 | | | | | | | 1 | | 1 |
| 4 | | | | | | | 1 | | 1 |
| 5.5 | | | | | | | 1(1) | | 1 |
| 7 | | | | | | | 4 | | 4 |
| 7.5 | | | | | | | 1(2) | | 1 |
| 12 | | | | | | | 1 | | 1 |
| 14.5 | | | | | | | | 1 | 1 |
| 15.5 | | | | | 1 | | | | 1 |
| 20 | | | | | | | 1 | | 1 |
| 30 | | 1 | | | | | | | 1 |
| 79 | | | 1 | | | | | | 1 |
| 80 | 1 | | 1 | | | | 2 | | 4 |
| 90 | | | | | | | | 1 | 1 |
| 100 | | | 1 | 2 | | | | | 3 |
| 120 | 2 | 1 | 3 | | | 1 | 2 | 2 | 11 |
| 平均 | | | | | | | | | |
| 最頻値 | | | - | | | | | | 120 |
| 総計 | 3 | 2 | 6 | 2 | 1 | 1 | 14 | 4 | 33 |

(1) 死没年齢を5歳6歳とする(3)の資料である。下のヒストグラムでは5歳、6歳のグラフにそれぞれ0.5度数を加算した。

(2) 死没年齢を7歳8歳とする(8)の資料である。下のヒストグラムでは7歳、8歳のグラフにそれぞれ0.5度数を加算した。

[2-2] 上記、(1) (2)の注を考慮して、ヒストグラムで修正を加えると次のようになる。



[2-3] A 文献（13 件）、B 文献（20 件）の男女を合わせた死没年齢の最頻値は 120 歳（度数 11〔相対度数 33.33〕）である。文献別では A 文献は 120 歳（度数 6〔相対度数 46.15〕）、B 文献では 120 歳（度数 5〔相対度数 25.00〕）である。またヒストグラムでは男女を分けて示さなかった。

平均を出せば、A 文献は 83.8 歳、B 文献は 47.9 歳、A 文献・B 文献を合わせた平均は 68.0 歳である。

[3] 上記をもとに若干の考察を加える。

少数の資料をもとにした統計であるが、ヒストグラムにおいては、死没年齢の山は 20 歳以前の幼年期・若年期の死亡と、80 歳以降の老年期の死亡に分かれ、35 歳から 75 歳までの中間期の死亡資料は 1 つもないというきわめて不自然な形となっている。

おそらく幼年期・若年期の死亡記事は当時の医学の未発達による、幼・少年期の死亡が多かった事実を反映したものであろう。

これに対する死亡年齢の最頻値が示す 120 歳は、説話的にモディファイされたものであって、現実を表したものであったとは考えられない。医学の発達した現代にあっても、このようなことはあり得ないからである。また A 文献の平均値の 83.8 歳も、B 文献の平均値の 68.0 歳も現実的な数字でないことは明らかである。これは多くの 120 歳で死亡したという資料を含めて平均値であるからである。

したがってこれらが当時の平均寿命を表すとも読めないわけである。まったくの推測であるが、当時の平均寿命は男女ともに 40 歳を上回ることはなかったのではなかろうか。しかしながら前項に書いたように、成人期に達して以降の平均余命は、かなり高かったのではないかと想像される。